

鎌田東二の 霊性の京都学

85

—京都の
生態智を求めて—

富士谷御杖と内モンゴルの鳴鏑と子安貝

江戸時代京都の国学者・富士谷御杖（二七六八—一八二三）は、儒学を伯父の皆川淇園（一七三三—一八〇七）に、和歌を公卿の広橋兼胤（一七一五—一七八一）に、国語学を父の富士谷成章（一七三八—一七七九）に学んだ。

富士谷御杖の父の富士谷成章は、皆川成慶の二男で、皆川淇園は富士谷成章の実兄である。成章は九州筑後の柳川藩立花家の京都留守居役の買物役人である富士谷家の養子となり、漢学を兄の皆川淇園に学び、和歌を霊元天皇の第一皇子の有栖川宮職仁親王に学び、「六運略図」「北辺七体七百首」「挿頭抄」「脚結抄」などの和歌書や国語の品詞分類などについての著作を残した。

富士谷御杖は、本居宣長（一七三〇

—一八〇一）が没して八年後の文化五年（一八〇九）に主著『古事記燈』の序論に当たる「古事記大旨」を著わすが、その冒頭で次のような痛烈な本居宣長批判を展開している。

「古来神典をとく人、みかどの御はじめ也と思はぬ人なく、この言霊におもひいたられざりしより、わが大御国、経のたぐひのなきをいきどほりて、儒仏の書をもて附会潤色し、しひて理ありげにときなされたれど、もとよりなにの徴する所もなく、私にときたる物なれば、或は経のごとく、或は史のごとくにて、信すべく信すべからざる事どもなり、此故に世々儒仏にもきそふめれど、すべて私言なれば、かしこはめでたく、こゝはあはしき所々ありて、教とするにたらざる事どもな

るがゆゑに、儒仏の教にはけおされたるもことわりなること也、しかるに近比、伊勢国松阪なる本居宣長、古事記の日本紀にまされる事を見いで、かの皇子の非どもあげつらへり、げにその論をみるに、いとものともさることにて、此記はわが御国言のまゝをしるされたる所多きにても、宣長が論あたるは明らかなる事也、予も此ぬしの恩によりて、力をもいれずしてこの記の正しきをしりぬ、もと神代巻は此記の書ざまにはたがひて、諸本を大成し、その心をえて、かの皇子、からぶみまねびをむねと書たまひし物とみゆ、しかるに古来の神学者、ことごとく神代巻にのみよれるがゆゑに、此記の正しきに心つく人もなかりしを、今かくよ其光にあらはれたるは、わが

りて火を燃く。灰変りて孔に為りて、細響有り。鳴鏑の如し」とあるが、細い響きの音がして「鳴鏑」のようだったとあるので、射ると空を鳴りながら飛ぶさまが雷に似ていたと解し、「蔓菁根」の形に似ているという説は誤りであると指摘している。そして、この「鳴鏑」の矢が『古事記』のところでどこに見えているので、古代にはよく使用されたものと推測し、『日本書紀』に「八目の鳴鏑」が出てくるのを指摘している。この「八目」とは鏑にたくさんの穴が開いていることを指している。さらには、『万葉集』巻九の一六七八番歌に「響矢」とあることにも触れている。

ねとする事」に思い至らない立場である。

富士谷御杖は、ここで、二つの解釈学を退ける。儒仏の牽強附会の解釈学と表層的表面的解釈学の二つを。御杖は、本居宣長の『古事記伝』の重要性を認めた上で、その根本的欠陥を、①「言霊についての浅見、②「詞の表」のみを重視する表層主義、③神認識における不可知論的態度、④として批判する。そして、自説の言霊的古事記深層（真相）解釈学を全面展開していくのであるが、その富士谷御杖の解釈学については次号で詳述するとして、唐突であるが、ここで『古事記』と内モンゴルとの接点に触れておきたい。

内モンゴルと『古事記』の 鳴鏑と子安貝問題

実はわたしはこの八月三日から九日まで一週間、一八年続いたNPO法人東京自由大学の第一期最後の第一八回夏合宿内モンゴル研修の旅として中華人民共和国の内モンゴルを巡り、オーラ（阿古拉）、ハイラル（海拉尔）、フルンボイル大草原、ロシアとの国境の満州里などを回った。その旅の中で、わたしは思いがけず、比叡山の神のルーツに行き当たったの

である。それが「鳴鏑」である。

『古事記』上巻には、この「鳴鏑」という語が三回出てくる。ササノヲノミコトのいる根の堅州国に到ったオホナムチ（大國主神）に、ササノヲが「鳴鏑を大野の中に射入れて、その矢を採らしめたまひき」とあるのが、その初出である。ササノヲが「鳴鏑」の矢を放ってオホナムチにその矢を取って来くるように命じ、オホナムチが矢を採りに野に入った時、火を放って焼き殺そうとした。すると、鼠がやってきて、「内はほらほら、外はすぶすぶ」と言ったので、その地面を踏みしめると、その土が落ちて穴倉のようになったので、そこに入って、野火が通り過ぎるのを待っていると、「鼠、鳴鏑を咋ひ持ちて、出で来て奉りき」、つまり、鼠がその「鳴鏑」を口に銜えて持って来て、オホナムチに捧げ、助けたというのである。

この「鳴鏑」について、本居宣長は『古事記伝』の中で、『日本書紀』では「なるかぶら」と読まれているが、「鳴神夫理矢」で、「かみ」の「み」を省いて「りや」が「ら」に縮まったものとしている。また、『日本書紀』巻二十七の天智天皇紀に、「日本の高麗を救ふ軍将等、百済の加巴利浜に泊

りて火を燃く。灰変りて孔に為りて、細響有り。鳴鏑の如し」とあるが、細い響きの音がして「鳴鏑」のようだったとあるので、射ると空を鳴りながら飛ぶさまが雷に似ていたと解し、「蔓菁根」の形に似ているという説は誤りであると指摘している。そして、この「鳴鏑」の矢が『古事記』のところでどこに見えているので、古代にはよく使用されたものと推測し、『日本書紀』に「八目の鳴鏑」が出てくるのを指摘している。この「八目」とは鏑にたくさんの穴が開いていることを指している。さらには、『万葉集』巻九の一六七八番歌に「響矢」とあることにも触れている。

また、「内はほらほら、外はすぶすぶ」と言った鼠の言葉については、「富良」は、「洞」で、ものの中が空虚で広いことを指し、「須夫」は窄んでいて狭いさまを言うとする。そこで、鼠は地中に掘った穴は広く、入り口は狭いから焼ける心配はないので、そこに隠れて危難を切り抜けてくださいという意味を持ち、「内はほらほら、外はすぶすぶ」とは鼠の鳴き声の模倣かも知れないとも推測している。

富士谷御杖によれば、この本居宣長の注釈は「詞の表」のみを解釈した表



鎌田 東二
かまた とうじ

1951年、徳島県生まれ。國學院大學文学部哲学科卒業。同大学院文学研究科博士課程神道学専攻修了。上智大学グリーンフクア研究所特任教授。放送大学客員教授。京都大学名誉教授。宗教学・民俗学。文学博士。神道ソングライター。著書に『世直しの思想』春秋社、『世阿弥』青土社、『講座スピリチュアル学全7巻』BNP他。
<http://homepage2.nifty.com/moon21/>



中国内モンゴル・ハイラルのフルンボイル民族博物館に展示された子安貝(左)と海蝶(中)と鳴鏑(右)

ると同時に、葛野の松尾「すなわち松尾大社に鎮座し「鳴鏑」を持つている「神」であると言うのである。

わたしはその「鳴鏑」をハイラルのフルンボイル民族博物館の展示物の中に見出した。

この「鳴鏑」は、通常、矢の先端に付けて、弓で射て音を鳴らす道具である。木や鹿角や牛角や青銅などで蕪の形に作り、中を空洞にし、周りに四個ほどの小さな孔を穿つ。そのまま息を吹き込むと音を出すこともできるが、矢に付けた鳴鏑は、弓で射られて飛んでいく際に自然にその孔から空気が

入って高い音が鳴る仕組みである。中国の北部を遊動していた匈奴は、この「鳴鏑」を用いていたという。東北アジア一帯でも「鳴鏑」は用いられた。古代日本に匈奴系鮮卑系の「鳴鏑」文化が入ってきていたことは間違いない。それをスサノヲオホナムチオホトシオホヤマグヒという神々が担っている。そして、秦氏が齎した松尾の神すなわち「大山咋神」が「鳴鏑」を持つ神であると『古事記』は明言している。

スサノヲの系譜になぜ「鳴鏑」が出てくるのか

もっとも、この『古事記』の「大年神の神裔」の条は、平安時代初期に後から挿入されたのではないかと疑われている箇所でもあり、『古事記』上巻本文中でもとりわけ解釈の難しいところである。とはいえ、スサノヲの系譜に「鳴鏑」が出てくることの意味を富士谷御杖に倣って深層的に解釈してみる必要もあろう。

『日本書紀』には、スサノヲが朝鮮に渡っていることがはっきりと記されているから、スサノヲと鮮卑系の接続点を考えることができる。

鮮卑は二世紀に全モンゴルを統一

した後、慕容氏(前燕・後燕・西燕・南燕)、乞伏氏(西秦)、秃髮氏(南涼)、拓跋氏(北魏)などに分裂し、拓跋氏は華北を統一して「北魏」を建国する。彼らは強力な騎馬軍団を率いていたが、北魏、東魏、西魏、北齊、北周、隋、唐も、祖先は鮮卑系であるとされる。

検討しなければならぬのは、スサノヲと朝鮮との関係や馬との関係である。『日本書紀』にはスサノヲが「新羅国の曾戸茂梨之処」や「韓郷之島」に行ったことが記されているが、『古事記』には一切そのような記述はない。代わってあるのが、天照大御神との「宇気比」を行ない、それによって自分の心が「清明」であることが証明されたとして、高天原の農耕の邪魔をした末に、馬の皮を剥いで血だらけにして、神聖な機織りをしているところに投げ入れて若い機織り女を殺してしまったという記述である。

「天照大御神、忌服屋に坐して、神御衣織らしめたまひし時、その服屋の頂を穿ち、天の斑馬を逆剥ぎに剥ぎて墮し入るる時に、天の服織女見驚きて、梭に陰上を衝きて死にき」とあるのが、それである。

ここで、唐突に、馬が出てくる。そ

して、その馬の皮を「逆剥ぎに剥ぐ」という残虐に見える行為をスサノヲが行なったことが記されている。これまで、泣き叫んでばかりいたスサノヲにそのような行為を行なう動機と発想と経験があるだろうか？ その唐突さは、謎めいている。そこでここは、スサノヲが馬の文化の圏内にいたということを想定してみる。つまり、スサノヲ神話には朝鮮や内モンゴルの騎馬文化が背景にあり、その接点を持つていると想定してみることによって、さまざまな接続点が見えてくることになる。

これまで、三品彰英を始め、何人も研究者が日本神話と朝鮮神話との共通点や影響関係を指摘してきた。秦氏のことを考えるだけでもその接点を否定することはできないが、それだけでなく、さらに広く鮮卑文化圏との関係も視野に入れて検討していく必要があるだろう。

ハイラルのフルンボイル民族博物館に展示されていた石碑には、昔、拓跋部がこのハイラル地域に住んでいたことや、洞窟内の祭壇で天地自然の神々や祖先を祭ったこと、またこの時期の鮮卑の首長が「可汗」と呼ばれていたことが記されている。この鮮卑系

の洞窟祭祀(3)や鳴鏑文化やシャーマニズム文化が古代日本の祭祀文化とつながっていることを改めてよく考えて見なければならぬ。

さて、フルンボイル民族博物館でも一つ衝撃を受けた展示が子安貝であった。言うまでもなく、女陰の形態を持つ子安貝は、安産や豊饒の象徴である。それは、生命の容れ物として母胎のメタファーとなる。その子安貝が信じがたいほど大量に内モンゴルのシャーマンの衣装に縫い付けられていた。



シャーマン衣装の子安貝。

なぜ海のないモンゴルシャーマンがシャーマン衣装に「子安貝」をこれほどたくさん身に付けているのだろうか？ その量とデザインの美しさと見事に圧倒された。

これには心底驚いた。これほど見事な子安貝集積回路は初めて実見する。これは只事ではない。半端ではない。凄すぎる。

この「子安貝」はそれを見る者にも着る者にも確実に「身心変容」を引き起こす。そして、胴体下部に金属器でジャラジャラと音のなる楽器が付いているのは、その「身心変容」を倍加し促進する。この見事な衣装の装着技法。

先に述べたように、「子安貝」が女陰や母胎のメタファーであることはその名称からも明らかだ。その「子安貝」こそが神霊の受信機であり、霊的アンテナなのである。その「子安貝」が神霊音をキャッチし受信するのだ。このシャーマン衣装を見ていると、その身心変容技法の意味と作用がよくわかってくる。

そもそも中国古代の殷の時代の遺跡から大量の子安貝が出土している。もちろん、青銅器や玉石も大量に含まれているが、子安貝は単なる貨幣や装

飾以上の呪術性を帯びていたと考えられる。甲骨文を遺した殷では卜官による天帝に神意を質す祭祀が行われていた。その時代の祭祀に青銅器や玉器のみならず、子安貝も用いられていたことは想像に難くない。

「鳴鏑」と「子安貝」を通して、古代日本と古代中国、そして古代内モンゴルとの密接なつながりが見えてくる。残念ながら、『古事記』には「鳴鏑」は何度も出てくるが、「子安貝」のことは出てこない。その代わりに、大国主神と並ぶもう一柱の「国つ神」である「猿田彦大神」が「比良夫貝」に手を挟まれて溺れ、海に没していくさまが描かれている。また、オホナムチが兄神に殺害された時、「キサカヒヒメ」赤貝」と「ウムギヒメ」蛤」の貝にオホナムチの肉片を入れ、それに「母の乳汁」を加えて再生させた様子が描かれている(4)。ともあれ、スサノヲの系譜にまつわる「鳴鏑」文化とサルタヒコにまつわる「貝」文化の交差点

と古代日本および天つ神と国つ神の接続線を見ていくことができる。その深層域を探りたい。



北後祭祖。

注

(1)『富士谷御杖集』第一巻、国民精神文化研究所、六一七頁、一九三六年
(2)『そのうち』本居宣長があらはせる古事記伝をみて、さばかりの博覧なれば、これにてこそ疑網はかめとおもひつるに、猶おなしさまなるのみならず、今ひときは、詞の表に縛せらるる事つよくて、おほかた神典中、心えかたき事ともは、神の御うへは、人智をもてはかるへからずといふをいたりとせり(三三九頁)と『古事記』にある。これに対して、本居宣長は、富士谷成章と御杖親子のことを「玉勝鬘」の「藤谷の成章といひし人の事」の中で、「富士谷成章の国語学的研究を大変高く評価し、その子の御杖のごとく、」またとしわかれど、心いれて、わざと此道ものすときくは、ちうの気はひもそはりたらむと、たのもしくおほゆかし」と期待を込めて記している。
(3)一九八〇年の夏、内モンゴルのハイラル地域の東興安嶺北部の原生林の中で鮮卑拓跋部の祭祀跡のある巨大な洞窟「嘎仙洞」が発見された。その洞窟は、縦横約二〇メートル、奥行約一〇〇メートルもあり、洞窟内の壁には四四三年に刻まれた銘文があった。その洞窟内で、祭祀が執り行なわれた。
(4)「猿田彦古神、阿那阿に坐す時、漁して、比良夫貝にその手を啖ひ合はさえて、海塩に沈み溺れたまひき」、「ここにその御祖の命、哭き悲ひて、天に参上りて、神産巢日之命に請し時、すなはち蟹貝比売と蛤貝比売とを遣はして、作り活かさしたまひき。ここに蟹貝比売、割け集めて、蛤貝比売、待ち承けて、母の乳汁を塗りしかば、麗しき丈夫に成りて、出で遊行ひき」と『古事記』上巻にある。